

A Dead Sea Document : Song of the Sabbath Sacrifice and Hebrews 1-2

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-02-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 原口, 尚彰 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24406

死海写本『安息日の犠牲の歌』と ヘブル書 1-2 章

原 口 尚 彰

1. 問題の所在

死海写本『安息日の犠牲の歌 (4QShirShabb ; 11QShirShabb ; Mas-ShirShabb)』の存在は早くから知られていたが、この文書を含んだ死海写本断片は発見後 40 年近く、一部の学者たちによって独占使用され、一般の研究者はこれらの特権的学者たちによって時折発表される論文を通して断片的にしかこの文書の内容を知ることが出来なかった。しかし、1985 年に C. Newsom, *Songs of the Sabbath Sacrifice: A Critical Edition* が刊行され、さらに 1998 年には、J.H. Charlesworth, *The Dead Sea Scrolls. vol. 4B: Angelic Liturgy* (Louisville, KT: Westminster/J. Knox, 1998) ; E. Martinez, E.J.T. Tigchelaar, A.S. van der Woude, *Discoveries in the Judaean Desert. vol. 23: Qumran Cave 11* (Oxford; Clarendon, 1998), 1999 年には、B. Nitzan et al., *Discoveries in the Judaean Desert. vol. 29: Qumran Cave 4, XX: Poetical and Liturgical Texts* (Oxford; Clarendon, 1999) が刊行されることによって、一般の研究者が文書全体を利用できる校訂本が与えられた¹。さらに 1993 年には E. Tov 監修による死海

文書すべてのマイクロフィッシュ版がオランダのブリル社より刊行され、1997年には T.H. Lim 編集による CD-ROM 版が刊行された²。こうして現在は、一部の特権的な研究者たちばかりでなく、一般の研究者も校訂本を写本原本と比較検討することが可能になり、『安息日の犠牲の歌』の本格的な研究を行うことが出来るようになった。本研究における『安息日の犠牲の歌』への言及は、特段に断るとき以外は、J.H. Charlesworth, *The Dead Sea Scrolls. vol. 4B: Angelic Liturgy* (Louisville, KY: Westminster/J. Knox, 1998) に依拠している。

新約聖書学の視点から注目されるのは、この文書は極めて発達した天使論を示しており、特に天の神殿における天使たちによる礼拝の表象が、ヘブル書や黙示録の背景に存在している天上の礼拝の表象と接点を持っていることである。本研究ではまず始めとして、『安息日の犠牲の歌』の天使論とヘブル書 1-2 章の天使論との関係を考察してみたい。この比較検討によって、ヘブル書 1-2 章について以下の 3 点が解明できると考えられる。

1) ヘブル書 1: 1-2: 9 では天使たちに対する神の子キリストの優越ということが強調されているが、著者が何故こうした議論を展開しなければならなかったのかの理由。

2) この部分に出て来る旧約引用は七十人訳に拠っているが、ヘブライ語本文の意味とはかなり異なった訳語が当てられている例がある(例えば、2: 8=詩 8: 7 LXX)。これらの特異な訳語が採用された宗教史的背景。

3) ヘブル書 1-2 章の反天使論と、3 章以下に展開される大祭司キリスト論の議論との関係。

2. 『安息日の犠牲の歌』の天使論

1) 天の神殿・宮廷と天使たち

旧約聖書における天使の最も一般的な呼称である「御使い (מלאך)」は(創 24: 7, 40; 28: 12; 32: 2; 出 23: 23; 32: 34; 33: 2; 民 20: 16; イザ 42: 19; ホセ 12: 5), 『安息日の犠牲の歌』では特に, 4Q405 に頻繁に使用されているが(4Q405 17.4, 5; 19.7; 20.ii.9; 23.i.8; 49.3; 81.2), 他の断片には稀にしか出てこない(4Q403 1.i.1; 1.ii.23; 4Q407 1.3; 11QSS ii.5)。この文書において天使たちの呼称は以下に見るように, むしろ「御使い (מלאך)」以外の呼称の方が多く使用されている。

例えば, この文書において天使は「霊 (נפש)」と呼ばれる(4Q400 1.i.5; 1.ii.5; 4Q403 1. i.37, 39, 40, 43, 44, 45; 1.ii.1, 3, 7, 8, 9, 10; 4Q404 5.1, 5; 4Q405 4-5.2; 6.5, 7, 8; 14-15.1, 2, 4; 17.3, 5; 18.1, 3; 19.2, 3, 4, 5; 20-21-22.10, 11; 23.i.9-10; 23.ii.6, 7, 8, 9)。このことは, 他の死海文書にも見られる現象である(1QS3.24; 4.23; 1QM 12.9; 4QBer^a [=4Q286]2.1)。天使を天の宮廷で神に仕える霊と呼ぶことは, ユダヤ教黙示文学や(ヨベ 2: 2; エチ・エノ 15: 4, 7, 10), 初期キリスト教文献に見られる(ヘブ 1: 7 [cf. 詩 104: 2-3]; 黙 1: 4; 2: 7; 4: 5; 5: 6; 14: 13)。

この文書において天使たちは「聖なる者たち (קדושים)」とも呼ばれる(4Q400 1.i.3; 1.i.15; 2.1; 4Q403 1.i.24, 31, 41; 4Q405 6.2, 5; 11.2; 23.ii.6, 7)。この天使の呼称は他の死海文書や(1QM1.15; 12.1, 8), ユ

ダヤ教黙示文学にも見られる（ヨベ 31.14；エチ・エノ 9.3；15.4；47.2）。

他方，אלים（神々）とאלהים（神々）が天使の呼称として用いられていることは、死海文書に特有である。『安息日の犠牲の歌』にしばしば現れる אלים（神々）という表現は（4Q400 1.i.4, 20；1.ii.17；2.i.7；4Q401 14.i.5；4Q402 4.i.8；4Q403 1.i.21；1.ii.26；4Q405 14.i.3；11QSS5.1.6），天使たちを王である神を中心にする天上の宮廷を構成する王侯たちのイメージで捉えている（特に，「神々の神（אלהי אלהים）」4Q403 1.ii.26；4Q405 14.i.3 を参照）。この表現は、他の死海文書においてもしばしば天使の呼称として用いられる（1QH10.8；18.11；1QM1.10, 11；18.6；1QSb 2.5；11QT25.16；28.7, 10）。

אלהים という名詞は（マソラ本文の正書法では אלהים），語形は複数形であるが，意味の上で単数名詞（神）として使用される場合と，複数名詞の意味（神々）で使用される場合とがある。旧約聖書において，この言葉が意味の上で単数名詞として使用されるときは，専らイスラエルの神ヤハウェを指す（創 1：1, 2, 3, 4, 5, 6, 8, 9, 10；28：12；出 20：1, 25；22：27；イザ 2：3；35：4；53：2 エレ 10：10；23：26；ホセ 4：1；6：6）。これに対して，『安息日の犠牲の歌』はこの言葉に複数形の意味を込めて，天使たちの呼称として用いている（4Q403 1.ii.6；4Q405 6.5；14.1.5, 7；19.i.4, 6；20.ii.11）。

この形が旧約聖書において複数の意味で使用されるときは，異教の神々のことを指し，否定的な意味が込められている（出 18：21；20：3；23：13；申 5：7；29：25；32：17；詩 82：6）。このことを考えると，『安息日の犠牲の歌』が אלהים（神々）という言葉で天使たちの呼称として

用いているのは特異なことである。しかも、この文書は、旧約聖書ではヤハウェに対してしか用いられない、אלהים [生ける神(々)] という表現を(申 5:26; エレ 10:10; 23:26), 天使たちに対して適用している(4Q403 1.ii.6; 4Q405 14.1.5, 7; 19.i.4, 6; 20.ii.11)。この事実は、クムラン教団において天使の神性が強く意識され、天使が崇拜されていたことを反映しているのであろう(1Q401 14.i.7 を参照)。彼らは、これらの神々(=天使たち)が天の宮廷において、天の王である神に従属し、神を讃美する役割を与えられていると考えることによって、ヤハウェ信仰と調和させていたと考えられる。

天上の宮廷での会議を構成する神々の表象は、元々カナン起源であったが、イスラエルによってヤハウェ信仰の中に取り込まれたものであり、旧約聖書中の一部にその痕跡が見られる³。例えば、詩編 29:1; 89:7 には天上の会議の表象が見られ、構成員である神々は「神々の子ら(בני אלהים)」と呼ばれ、ヤハウェを讃美することが勧められている。他方、創 6:2; 申 32:8 (4QDt による)⁴; ヨブ 1:6; 2:1; 38:7 にも天上の会議の表象が見られ、そこでは神々が「神の子ら(בני אלהים)」と呼ばれている。しかし、これらの旧約箇所は天使を אלהים (神々) または אלהים (神々) と呼ぶことまではしていない。また、時代が下ると、天上の会議を構成する神々が神に仕える天使たちであると解釈されたことを、七十人訳聖書がこの句を「神の天使たち (οἱ ἄγγελοι τοῦ θεοῦ)」と訳したことが示している。

2) 大天使たちと祭司職

『安息日の犠牲の歌』の天使論は、天使たちの間に階級差が存在する

を前提にしている。この文書において主だった天使たちは^{אֱלֹהִים} (君々)と呼ばれて、他の一般の天使たちとは区別されている (4Q400 1.ii.14; 3.ii.2; 4Q401 3.3; 14.ii.6; 23.1; 4Q403 1.i.1, 6, 10, 17, 18-19, 21, 23-24, 26; 1.ii.20, 21; 4Q405 3.i.12a; 3.ii.6; 8-9.5-6; 13.2-3, 4-5, 7)。^{אֱלֹהִים} (君々) は^{רָאשִׁים} (司たち)とも呼ばれている (1Q401 3.2; 13.3; 14.i.6; 4Q403 1.i.1, 21, 23-24, 31-32, 34, 43; 1.ii.3, 10, 11, 16, 20, 21, 24, 34; 4Q405 3.i.12a; 3.ii.6; 4-5.2; 6.4; 7.4; 8-9.5-6; 23.ii.10, 11, 12; 11QSS5-6.8-9; MaSS ii.7)。この^{רָאשִׁים} (司たち)とは、ダニエル書以来ユダヤ教黙示文学に登場する大天使たちのことであろう (ダニ 8:15-17; 9:21-23; 10:13, 21; 12:1; トビト 3:17; 5:4-17; 6:1-9; 9:1-6; 11:14-15; 12:15; レビ遺 3:5-8; エチ・エノ 9:1; 10:4, 9, 11; 19:1; 20:1-6; 40:8-10; 54:6; 71:9, 13)⁵。大天使たちは7人であり (4Q403 1.i.1-10a; 1.i.10b-26a; トビト 12:15; レビ遺 8:2-17), ミカエル, ラファエル, ガブリエル, ペヌエル, ウリエル, ラグエル, サラカエルのことであると考えられる (ダニ 8:15-17; 9:21-23; 10:13, 21; 12:1; トビト 3:17; 5:4-17; 6:1-9; 9:1-6; 11:14-15; 12:15; エチ・エノ 9:1; 10:4, 9, 11; 19:1; 20:1-6; 40:8-10; 54:6; 71:9, 13 を参照)。

この大天使たちは『安息日の犠牲の歌』では,^{כֹּהֲנִים} (祭司たち) [マソラ本文の正書法では^{כֹּהֲנִים}]と呼ばれている (4Q400 1.i.3, 8, 17, 19, 20; 4.2; 4Q401 13.3; 4Q403 1.ii.19, 24; 4Q405 20-21-22.1; 4Q411 35.4)⁶。大天使たちは天の王である神の王座に近付くことが出来る特権を与えられており, 「内陣の祭司たち (^{כֹּהֲנֵי קֹדֶשׁ})」 (4Q400 1.i.8, 17, 19; 4Q403 1.ii.19, 24; 4Q405 21.1) あるいは「内陣の聖なる者たち (^{קֹדְשֵׁי קֹדֶשׁ})」

(4Q401 16.3; 4Q402 9.4), 「内陣の霊 (רוח קודש)」(4Q405 14-15.i.4) と呼ばれている⁷。彼らは天の祭司として、神と一般の天使や人間たちの間のとりなしをする務めが与えられていた。大勢の天使たちは天の神殿・宮廷にあって神を讃美し、神を称えて歌うことが求められているだけであるが (4Q400 1.i.2-6; 2.1; 4Q403 1.i.30-35, 36-39a, 39b-40, 41-46; cf. 1QM12.1), 神によって祭司に任じられた (4Q400 1.i.3-4), 7人の大天使は(4Q403 1.i.2-10; 1.i.10-28; 1.ii.27-29), 神の玉座に近づいて (4Q400 1.1.7-10, 16-17), 神へ犠牲を捧げ (4Q403 1.ii.27-29), 民の罪の赦しのためにとりなしをなし (4Q400 1.i.16-18), 神の名によって天使たちと義人たちに祝福を与える (4Q403 1.i.10-28; 4Q405 3.ii.6)。

他方、『安息日の犠牲の歌』は神の意思は隠されていると考え、神の意思を知るためには神によって啓示される特別な知識 (דעת) が必要であると考えている。そこで、この文書は神をしばしば「知識の神 (אלוהי דעת)」と呼んでいる (4Q400 2.8; 4Q401 11.1; 4Q402 4.12; 4Q405 23.ii.12)。神に直接近付いてその知識を伝授される特権を持つのは大天使たちであり (4Q400 1.i.6; 2.7), そのため彼らは「知識の神々 (אלי דעת)」(4Q400 2.1, 8; 4Q403 1.i.30-31; 1.i.38; 4Q404 4.7; 4Q405 23.i.8), 「知識と真理と正義の霊 (רוח דעת אמת וצדיק)」(4Q405 19.4), 「知識の天使 (מלאכי הדעת)」(11QSS 2-1-9 5) とも呼ばれている。この知識に基づいて彼らは、天使たちやクムラン共同体の義人たちに神の戒めの真の意味について教えるのである (4Q400 1.i.17; 4Q401 14.i.6-8; 4Q405 13.5; 23.ii.13; MasSS i.2)。

初期ユダヤ教文書や初期キリスト教文書（特に、黙示的傾向が強い

文書)において、天の神殿・宮廷において礼拝が行われ、天使たちが神を讃美する場面が描かれることは決して稀ではない(レビ遺3:5-8; エチ・エノ40:3-5; 黙4:1-5:14; イザ昇7:15; 1QM 12.1-5; 1QH3.22-26; 11QPsa 26.12)⁸。しかし、『安息日の犠牲の歌』のように、文書全体が天の礼拝の主題で貫かれている例は他にはない。また、他のユダヤ教文書において、天使の祭司的働きに言及する例は少数だが存在する(トビト12:12, 15; レビ遺3:5-8; ヨベ1:27-29; 2:1; 31:14; エチ・エノ47:2; 99:3)。しかし、大天使たちが「祭司」と呼ばれ、神の名によって祝福を与える例は他にはない。大天使たちの祭司職を強調する点は、『安息日の犠牲の歌』の顕著な特色の一つであると言える。

3) クムラン教団における礼拝と天使たち

① 礼拝共同体としてのクムラン教団

以上の思想内容の検討を踏まえて、『安息日の犠牲の歌』が礼拝共同体としてのクムラン教団の営みの中でどのような機能を果たしていたのかを問わなければならない。『宗規要覧』によれば、クムラン教団の指導者層は祭司たちであり、彼らは集会の上座を占め(1QS6.8; 8.1), 契約更新祭においては会衆を先導して神との契約に入る(2.20-21)。さらに、礼拝において祭司は神を讃美し(1.18-23), 神の前で民の罪の赦しのとりなしをし(8.3-10; 9.4-5), 神の名によって会衆に祝福を与える(2.1-4; cf. 1QM 13.1; 1QSb1.1)。祝禱のための典礼文を『祝福の言葉(1QSb)』と『祝禱(4QBerak; 4Q285; 11QBerak)』が与えている。

祭司的な背景を強く持った指導者たちに率いられた共同体であったので、クムラン共同体は祭儀に強い関心を寄せている。彼らはエルサレムの神殿は悪しき祭司たちによって汚されていると考え拒否していたが(1QH5.2-9)、彼ら自身の神殿を建てることはなかった。従って、当時の神殿礼拝の中心であった祭壇に動物の犠牲を捧げることが出来ず、義に適った生活と唇によって捧げる讃美の言葉が神に捧げる犠牲であると考えていた(1QS9.26; 10.6, 14)⁹。このような事情であったので、安息日毎に行われていたクムラン教団の礼拝は彼らの信仰生活において非常に重要な意味を持っていたと推定される。安息日を聖として、一切の仕事を休むことがモーセの十戒の第四戒の中心内容であるが(出 20:8-11; 申 5:11-15)、捕囚期に成立したエゼキエル書が描く、理想の神殿と祭儀の中には安息日において、全焼の犠牲と和解の犠牲とを捧げる祭儀が含まれている(エゼ 46:12)。捕囚期以後のイスラエルにおいて安息日は「聖会」即ち礼拝を行う日という意味も持っている(レビ 23:3)。クムラン教団もまた安息日を守って一切の仕事を休むと同時に(1QpHab11.8; 1QM2.8; 11QT 11.9; 13.17; 25.9; 27.9-10)、神の前での聖なる集いである礼拝を行っていた(11QT 27.8; 4Q512 33-35.1; さらに、ヨベ 2.17-22; 50.9-10 を参照)。『安息日の犠牲の歌』は、こうした安息日礼拝において捧げられた讃美歌の一部であろう¹⁰。

② クムランの会衆と天の礼拝

ここで注目されることは、文書の中に描かれている天使による天上の礼拝と、クムラン教団の祭司と会衆たちによって行われる地上の礼拝が同時的であることである¹¹。天使たちによる天上の礼拝と地上の

人間の礼拝が同時的に行われるという表象は、既に旧約聖書中の一部の讚美の詩編に萌芽的に認められるが(詩 14:1-2)、『安息日の犠牲の歌』においてそれが一層強化された形で出て来る。天の祭司である大天使たちは、「罪から悔い改めた者たち」であるクムランの会衆のために罪のとりなしを行い(1Q400 1.i.16-18)、天上の天使たちと共に地上の義人たちを祝福している(1Q403 1.i.10-26)。天の司たちである大天使たちは、天の軍勢と共に地上の礼拝に参与している会衆によって崇拝されている(1Q400 2.2; 4Q401 14.i.7)。天の祭司たちは天上の神殿で神に犠牲を捧げているが(4Q403 1.ii.26-29; 23.ii.1-13; 4Q405 23.i.5-6; 11QSS 8-7.2)、最大の捧物は昏によって捧げる神の讚美である(4Q403 1.ii.26-27, 33; 4Q405 23.ii.12)¹²。神を讚美する天使たちの舌は強力であり(4Q403 1.ii.27-29)、彼らが語る7つの祝福の言葉は「奇跡の言葉(דְּבַר מֵלָא)」として称揚されている(4Q403 3.ii.5-6; 1.i.1, 4, 11, 13, 16, 21-22, 24, 25; 4Q405 3.ii.5; 13.5; MassSS ii.23, 25)。

死すべき人間が神に捧げる礼拝には限界があることをクムラン共同体の人々は自覚しているが(4Q400 2.6-10)、彼らは地上の礼拝を通して、神的存在である天使たちが行う天の礼拝に参与することが出来る(この観念は、1QH3.22-23; 1QSb iv.1.24-26; 4QBer^b 2.12-13; 11QPa 26.9-12 にも見られる)¹³。こうして天使たちによる天の礼拝は、クムラン共同体の祭司たちが行う祭儀行為に正統性を与え、天の祝福を付与する働きを持ったと考えられる。

2. ヘブル書1-2章の天使論

1) ヘブル書1:1-14における天使たちに対する神の子キリストの優越の強調

ヘブル書1:1-4はこの文書全体の序言にあたり、御子を通しての啓示(1:1-2ab)、創造の仲介者(1:2c)、罪の浄めと天における即位(1:3)、天使への優越(1:4)というテーマを荘重な文体で語っている。この部分に続く1:5-14は旧約引用の連鎖(多くは王の詩編に属する)とその解釈によって、神の子の天上での即位(ヘブ1:5b=詩2:7 LXX; ヘブ1:5c=IIサム7:14 LXX; ヘブ1:13=詩110[109]:26-28 LXX)とその王位の永続性(ヘブ1:10-12=詩102[101]:10-12)、天使たちへの優越(ヘブ1:6=32:43bd/詩97[96]:7 LXX; ヘブ1:7=詩104[103]:4 LXX; ヘブ1:8-9=詩45[44]:7-8 LXX; ヘブ1:14)という主題が繰り返される。この部分はヘブル書1:3-4で提示された命題の聖書証明の機能を果たしているが、こうした議論がなされているのは、文書の読み手である信徒たちの間に天使崇拜が存在し(エフェ2:18を参照)、それは天上における天使の地位と職務についての理解と結び付いていたと考えられる¹⁴⁾。初期キリスト教の天使論は初期ユダヤ教の天使論の継承であるので、ヘブル書1章の議論が前提している、天上における天使の地位と職務について宗教史的背景の解明を行うためには、初期ユダヤ教の天使論を調べなければならない。初期ユダヤ教の文書の中で、天上の天使の地位と職務を、最も発達した形で示しているのが死海写本『安息日の犠牲の歌』であるので、

ヘブル書1章の議論を『安息日の犠牲の歌』の天使論との比較検討してみたい。

ヘブル書1:5-14は神の子の天上での即位ということを主張し、このことがキリストと天使たちとの決定的な相違であることを強調している(ヘブ1:5b=詩2:7 LXX; ヘブ1:5c=IIサム7:14 LXX; ヘブ1:13=詩110[109]:1 LXX)。ヘブル書は旧約聖書の王の即位の詩編や歴史書の箇所を引用して、神の子=天の王という主題を提示している(ヘブ1:5b=詩2:7 LXX; ヘブ1:5c=IIサム7:14 LXX)。他方、ヘブル書1:13は詩編110[109]:1 LXXの引用して同じ主題を、「神の右に座る」という表象を通して強調している。この句が述べている「神の右に座る」ということは、ヘブル書1:13の他に1:3d; 8:1; 10:12; 12:2にも出て来ており、ヘブル書のキリスト論の重要な構成要素となっている¹⁵。これに対して『安息日の犠牲の歌』において主だった天使たちは **אֱלֹהִים** (君々) や (4Q400 1.ii.14; 3.ii.2; 4Q401 3.3; 14.ii.6; 23.1; 4Q403 1.i.1, 6, 10, 17, 18-19, 21, 23-24, 26; 1.ii.20, 21; 4Q405 3.i.12a; 3.ii.6; 8-9.5-6; 13.2-3, 4-5, 7), **אֱלֹהִים** (司たち) と呼ばれて (4Q401 3.2; 13.3; 14.i.6; 4Q403 1.i.1, 21, 23-24, 31-32, 34, 43; 1.ii.3, 10, 11, 16, 20, 21, 24, 34; 4Q405 3.i.12a; 3.ii.6; 4-5.2; 6.4; 7.4; 8-9.5-6; 23.ii.10, 11, 12; 11QSS5-6.8-9; MaSS ii.7), 天の神殿・宮廷を構成する諸侯のようなイメージで捉えられ、高い地位が与えられているが、天の王とされるのは神のみであり (4Q400 1.i.8, 13; 1.ii.7, 8, 14; 2.5; 4Q401 1.5; 13.1; 14.ii.8; 4Q402 2.4; 3.ii.11; 4Q403 1.i.31, 34, 38; 1.ii.23, 24, 25, 26; 4Q404 5.6; 6.2; 4Q405 14-15.i.3, 5, 7; 19.3, 8 その他), 大天使たちに天の王である神に並ぶ地位が与えられている

訳ではない¹⁶。彼らは決して神の「右に座る」事はないのである¹⁷。

大天使たちは『安息日の犠牲の歌』において、כהנים (祭司たち) [マソラ本文の正書法では כהנים] と呼ばれている (4Q400 1.i.3, 8, 17, 19, 20; 4.2; 4Q401 13.3; 4Q403 1.ii.19, 24; 4Q405 20-21-22.1; 4Q411 35.4)¹⁸。大天使たちは天の王である神の王座に近付くことが出来る特権を与えられており、「内陣の祭司たち (קריב כהני)」(4Q400 1.i.8, 17, 19; 4Q403 1.ii.19, 24; 4Q405 21.1) あるいは「内陣の聖なる者たち (קריב קדוש)」(4Q401 16.3; 4Q402 9.4), 「内陣の霊 (קריב רוּחַ)」(4Q405 14-15.i.4) と呼ばれ、天の祭司として、神と一般の天使や人間たちの間のとりなしをする務めを与えられている。神によって祭司に任じられた (4Q400 1.i.3-4), 7 人の大天使は (4Q403 1.i.2-10; 1.i.10-28; 1.ii.27-29), 神の玉座に近づいて (4Q400 1.1.7-10, 16-17), 神へ犠牲を捧げ (4Q403 1.ii.27-29), 民の罪の赦しのためにとりなしをなし (4Q400 1.i.16-18), 神の名によって天使たちと義人たちに祝福を与える (4Q403 1.i.10-28; 4Q405 3.ii.6)。

ヘブル書 1:3cd はキリストの罪の浄めの務め (1:3c 「罪の浄めを行って」) と天における即位 (1:3d 「神の右に座した」) とを一体のものとしている (10:12 も参照)¹⁹。罪の浄め、或いは、贖いの務めは天上におけるキリストの祭司的務めの中核をなすものである (9:26, 28; 10:12, 14)。ヘブル書の著者が主張するように、神の民のための罪の贖いの業を行う力が、神の右に座る神の子としての地位に基づいているのであれば、神の右に座る地位を与えられていない天使たちに民の罪の贖いの業を行う力はないことになる。ヘブル書 1:5-14 が神の子の天上での即位ということを主張していることは、天上の神殿・宮廷に

おける天使たちの祭司的職務の否定という契機を含んでいる。ヘブル書1章は天使たちに対して、神の子キリストを拝し（ヘブ1:6=32:43bd/詩97[96]:7 LXX）、キリストの奉仕者（ヘブ1:7=詩104[103]:4 LXX）、ないしは、仕える霊として、終末の救いを待ち望む信徒たちに仕える役割だけを認めている（ヘブ1:14）。

2) 神の意思の啓示者としての天使

『安息日の犠牲の歌』において、大天使たちは「知識の神々 (אֱלֹהֵי דַעַת)」(4Q400 2.1, 8; 4Q403 1.i.30-31; 1.i.38; 4Q404 4.7; 4Q405 23.i.8), 「知識と真理と正義の霊 (רוּחֵי דַעַת אֱמֶת וְצִדִּיקָא)」(4Q405 19.4), 「知識の天使 (מַלְאֲכֵי הַדַּעַת)」(11QSS 2-1-95)とも呼ばれており、神に近付いて神の意思についての知識を伝授される特権を持ち(4Q400 1.i.6; 2.7), この知識に基づいて彼らは、天使たちやクムラン共同体の義人たちに神の戒めの真の意味について教えるている(4Q400 1.i.17; 4Q401 14.i.6-8; 4Q405 13.5; 23.ii.13; MasSS i.2)。

これに対して、ヘブル書2:2はイスラエルの救済史における律法の啓示が(出20:1-23:33; 申5:6-21)、天使たちの仲介によるものであると述べている。モーセを通して与えられたシナイ契約が天使たちの仲介によるという考えは、ヨセフス『古代誌』15.136, ヨベル書1.27, 29; 2.1, 使徒言行録7:53, ガラテヤ書3:19にも見られ、初期ユダヤ教や初期キリスト教に広まっていた理解であった²⁰。他方、ヘブル書1:1-2はかつて神は預言者たちを通して語ったが、終末時にあたっては御子キリストを通して語ったと述べる。ヘブル書の特徴は、天使たちを通して啓示された律法が既に救済史上の過去に属し、キリストを通

して啓示された新しい契約の出現によって、既に無効なものになっていると考えている点である(ヘブ 7:18; 8:13 を参照)。このことは神の意思の啓示者としての天使の役割を救済史上の過去に限定し、終末に臨む現在の時における天使の職務を否定することを意味する。「知識の神々」(4Q400 2.1, 8; 4Q403 1.i.30-31; 1.i.38; 4Q404 4.7; 4Q405 23. i.8), 「知識と真理と正義の霊」(4Q405 19.4), 「知識の天使」(11QSS 2-1-9 5) としての大天使たちの働きの余地はここに存在しない。

3) ヘブ 2:7a=詩編 8:7a [6a] の問題

マソラ本文によるとこの句のヘブライ語本文は $\text{הֵמָּלָא עַם מַלְאָכָיו}$ 「彼を少しばかり神より低くし」となっているが、七十人訳はそれを $\eta\lambda\acute{\alpha}ττωσας\ αὐτὸν\ βραχὺ\ τι\ παρ'\ αγγέλους$ 「彼を少しの間天使たちより低くし」と訳し、ヘブル書はこの訳語をそのまま継承している²¹。この句によって言及されている「彼」とは、直ぐ前のヘブ 2:6b=詩編 8:6b [5b] に出て来る「人の子」である。詩編 8 編の文脈においてこの「人の子」はメシア称号ではなく、単に「人間」(詩 8:5a [6a]) というのと同義である。しかし、ヘブル書の著者はこの句をメシア的称号としてイエス・キリストへの言及と理解し、詩編 8:5-7 をキリストの受肉と高挙を表す根拠箇所としている²²。ヘブル書の著者の解釈によれば、ヘブ 2:7a=詩 8:6a [7a] 「彼を少しの間天使たちより低くし」とは、神の子であるキリストが(ヘブ 1:2, 5, 8) 人となり、地上の生涯を送ったことを指すことになる(フィリ 2:5-11 を参照)。こうした解釈が成立するのは、マソラ本文の הֵמָּלָא 「神より」ではなく、七十人訳の $\text{παρ'\ αγγέλους}$ 「天使たちより」に依拠しているからであ

る²³。そうすると、七十人訳が何故 אֱלֹהִים「神より」を *παρ' ἀγγέλους*「天使たちより」と訳したのかという問題が出て来る。注解者たちは七十人訳の訳者たちの神への畏れの念が、こうした訳語が採用された動機であるという説明に満足している²⁴。しかし、この訳語を採用した宗教史的背景をもっと考えてみなければならない。

先に見たように死海写本は、אֱלֹהִים（神々）とאֱלֹהִים（神々）を天使の呼称として用いている事実がある。死海文書において אֱלֹהִים（神々）は、天使の呼称として定着しており（1QH10.8; 18.11; 1QM1.10, 11; 18.6; 1QSb 2.5; 11QT25.16; 28.7, 10）、『安息日の犠牲の歌』にこの用例は頻出する（4Q400 1.i.4, 20; 1.ii.17; 2.i.7; 4Q401 14.i.5; 4Q402 4.i.8; 4Q403 1.i.21; 1.ii.26; 4Q405 14.i.3; 11QSS5.1.6）。この文書は、天使たちを王である神を中心にする天上の宮廷を構成する諸侯たちのイメージで捉えていると言える（特に、「神々の神（אֱלֹהִים אֱלֹהִים）」4Q403 1.ii.26; 4Q405 14.i.3 を参照）。

さらに、אֱלֹהִים という名詞を（マソラ本文の正書法では אֱלֹהִים），『安息日の犠牲の歌』はこの言葉に複数形の意味を込めて、天使たちの呼称として用いている（4Q403 1.ii.6; 4Q405 6.5; 14.1.5, 7; 19.i.4, 6; 20.ii.11）。天上の宮廷での会議を構成する神々の表象は、旧約聖書中の一部に見られ、詩編 29:1; 89:7 には天上の会議の表象が見られ、構成員である神々は「神々の子ら（בְּנֵי אֱלֹהִים）」と呼ばれ、ヤーウェを讃美することが勧められている。他方、創 6:2; 申 32:8（4QDt による）; ヨブ 1:6; 2:1; 38:7 にも天上の会議の表象が見られ、そこでは神々が「神の子ら（בְּנֵי אֱלֹהִים）」と呼ばれ、七十人訳聖書はこの句を「神の天使たち（οἱ ἄγγελοι τοῦ θεοῦ）」と訳している。初期ユダヤ教は異教の神々

の表象を天上の神殿・宮廷を構成する天使たちの表象に置き換えていたと考えられる。このことこそが、七十人訳が詩編 8:7a [6a] において, אלהים「神より」を *παρ' ἀγγέλους*「天使たちより」と訳したことの宗教史的背景である²⁵。ヘブル書もまた天の神殿・宮廷に天使たちが存在し、王である神を讃美する役割を持つことを肯定しており（ヘブ 12:22；さらに、黙 7:11-17 を参照）²⁶、七十人訳のこの訳語に違和感を持つことはなかったのであった。

4) 神の子の受肉と天使との関係

ヘブル書 2:5-9 は全体として一種のミドラッシュを形成しており²⁷、導入句（2:5-6a）と旧約引用（2:6b-7a＝詩 8:5-7a [4-6a]）と解釈句（2:8b-9）からなっている。詩編 8:5-7a [4-6a] の後半部（詩 8:6-7a [4-6a]）は、人間が神より低い地位に置かれている一方で、地上において他の生物を支配する特権的地位に置かれていることを述べている。著者はこの部分を再解釈して、キリストが受肉し人間となって送った地上の生活においては、天使たちより低い位置に置かれていたが、復活高挙後は世界の支配者として、すべてを服従させる地位に置かれていることを述べた根拠箇所であると考えている²⁸。このキリストの受肉と高挙という主題は、初期キリスト教の讃歌であるフィリピ書 2:5-11 と共通している²⁹。

ヘブル書の著者は、キリストが人となって、「天使より」低い地位に置かれたことの中に、神の子と人との連帯を見ている。天使と人間との根本的相違は、著者によれば前者は死なないのに対して、後者のいのちには限界があり、死を免れることが出来ないことにある（ヘブ 2:

9, 14-15)。人となったキリストは死の苦しみを通して救いを成就し、神の子としての栄光を受けたのであった(ヘブ2:9)。人間に不可避の死の運命をキリストが負ったのは、死の力を持つ悪魔を討ち滅ぼして、死の恐れのもとにある者たちを解放することである(2:14-15)。さらに、キリストは地上の生涯において試練にあったが、それは試練の中にある者たちを天の神殿において民の罪を贖う大祭司的の職務を果たすためであった(2:17-18)。祭司の基本的職務は神と人との間に立つて両者の間をとりなすことにあるが、そのためには高举して神の「右に座る」こと(ヘブ1:3d, 13; 8:1; 10:12; 12:2)だけではなく、受肉して人間との連帯することと(ヘブ2:9, 14-15; 4:14-16)が必要である。ヘブル書の著者の理解によれば、人となって「天使より」低い地位に置かれたことは、天使によっては遂行することが出来ない天における祭司職の基礎となっている。ヘブル書2:17-18において、天上における「忠実な大祭司」としての、キリストの祭司的職務について短い言及が置かれているのは、一見唐突に見えるが、ヘブル書1-2章全体の議論を要約し、次章以降で詳細に展開されることになる大祭司キリスト論への橋渡しをしている(3:1-4:13; 4:14-5:9; 6:9-20; 7:1-10:39を参照)。

3. 結論に代えて

以上の論述の全体をを踏まえると、ヘブル書1-2章の反天使論の焦点は神の子キリストの天における祭司職であり、そのために受肉して人間との連帯することと(ヘブ2:9, 14-15)、神の「右に座る」(ヘブ1:3d, 13; 8:1; 10:12; 12:2)神の子としての地位についての論

証がなされている。このことは、『安息日の犠牲の歌』に見られるような (4Q400 1.i.3, 8, 17, 19, 20; 4.2; 4Q401 13.3; 4Q403 1.ii.19, 24; 4Q405 20-21-22.1; 4Q411 35.4), 天上の神殿における天使の祭司職を否定し、神の子キリストの祭司職を強調することを意味した。ヘブル書 1-2 章の反天使論は、3 章以下に展開される大祭司キリスト論の議論と一見関連がないように見えるが、キリストの祭司職を他の祭司的存在への優越という視点から述べる点において共通性がある。キリストの天上の祭司職を、1:1-2:18 は天使の祭司職の否定を通して述べ、3:1-4:13 はモーセの祭司職との対比のもとに展開し、4:14-5:9; 6:9-20; 7:1-28 ではメルキゼデクの系列にある祭司職として論じ、9:1-10:39 ではアロン系の祭司職への優越という視点から述べている。ヘブル書 1-2 章と 3-10 章は天の祭司論という主題において一体をなしていると言える。

注

- 1 C. Newsom, *Songs of the Sabbath Sacrifice: A Critical Edition* (HSS27; Atlanta: Scholars, 1985)。この著作に先行して、『安息日の犠牲の歌』の部分的な校訂本作成の試みは、J. Strugnell, "The Angelic Liturgy at Qumran," in *Congress Volume: Oxford 1959* (TV Supplements 7; Leiden; Brill, 1960), 318-345; A.S. van der Woude, *Fragmente einer Rolle der Lieder für das Sabbatopfer aus Höhle XI von Qumran* (11QSirSabb), in *Von Kanaan bis Kerara* (hrsg. v. W.C. Delsman et al.; Neukirchen-Vluyn: Neukirchener Verlag, 1982) 311-337; C. Newsom/Y. Yadin, *The Massada Fragment of the Qumran Songs of the Sabbath Sacrifice*, *IEJ* 34 (1984) 77-88 に見られる。
- 2 E. Tov ed., *The Dead Sea Scrolls on Microfiche: A Comprehensive Facsimile Edition of the Texts from the Judean Desert* (Leiden: Brill, 1993); T.H. Lim (in consultation with P.S. Alexander), *The Dead Sea*

Scrolls Electronic Reference Library (vol. 1; Leiden: Brill, 1997).

- 3 F.M. Cross (興行勇訳)『カナン神話とヘブライ叙事詩』日本基督教団出版局, 1997年, 98-100, 241-244頁; 北 博「『天上の会議』の表象と預言者意識」金井美彦・月本昭男・山我哲雄編『古代イスラエルの預言者の思想世界』新教出版社, 1997年, 106-125頁を参照。
- 4 BHSの脚注は, 死海写本断片の復元がまだ十分に進まない頃の資料に基づいて, בני אלים と読んでいるが, より復元が進んだ写本断片はむしろ בני אלהים の読みを示している。この点については, P.W. Skehan, A Fragment of the 'Songs of Moses' (Deut 32) from Qumran, *BASOR* 136 (1954) 12-25; idem., The Scrolls and the Old Testament Text, in: ed. D.N. Freedman/J.C. Greenfield, *New Directions in Biblical Archaeology* (Garden City, NY: Doubleday, 1969) 89-100 を参照。
- 5 van de Woude, 311.
- 6 4Q401 11.3 には単数形の כִּי が見られる。
- 7 マソラ本文の קרי (「近さ」, 「内奥」) は, 死海写本では קרי と表記される。この点については, E. Qimron, *The Hebrew of the Dead Sea Scrolls* (Atlanta: Scholars Press, 1986) 65 を参照。
- 8 M. Weinfeld, The Angelic Song over the Luminaries in the Qumran Text, in: *Time to Prepare the Way in the Wilderness* (ed. D. Dimant/L.H. Schiffman; Leiden: Brill, 1995) 135-157 を見よ。
- 9 これに対して, van der Woude, 332 は, 天上の礼拝で天使たちが捧げる犠牲が, 地上の礼拝での犠牲の代替物になっていると考えている。
- 10 Newsom, 16-18; Davidson, 236; A.M. Schwemer, Gott als König in den Sabbatliedern, in: *Königsherrschaft Gottes und himmlischer Kult in Judentum, Urchristentum und in der hellenistischen Welt* (hrsg. v. M. Hengel/A.M. Schwemer; WUNT 55; Tübingen; Mohr, 1991) 49, 58.
- 11 Schwemer, 48; H. Löhr, Thronversammlung und preisender Tempel, in: *Königsherrschaft Gottes und himmlischer Kult in Judentum, Urchristentum und in der hellenistischen Welt* (hrsg. v. M. Hengel/A. M. Schwemer; WUNT 55; Tübingen; Mohr, 1991) 202.
- 12 Strugnell, 335; van der Woude, 332 が, 天上の礼拝において天使が捧げる犠牲のことだけに注目して, 讃美の捧げ物に考慮を払っていないのは一面的である。
- 13 Strugnell, 320; van der Woude, 332; Newsom, 18.
- 14 Y. Yadin, The Dead Sea Scrolls and the Epistle to the Hebrews, in:

- Aspects of the Dead Sea Scrolls (ed. C. Rabin; Scriptura Hierosolymitana 4; Jerusalem: Magnes, 1965) 39-40 に賛成。反天使論的契機を認めず、ヘブル書 1 章はキリストの引き立て役として天使へ言及しているのに過ぎないとする、Lane, Hebrews 1-8 (Waco, TX: Word Books, 1991) 19-23; L.T. Stuckenbruck, Angel Veneration Christology (WUNT 2.70; Tübingen: Mohr, 1991) 124-128 に反対。
- 15 新約文書におけるこの句の引用の詳しい比較分析が、W.R.G. Loader, Christ at the Right Hand-PS. CX. 1 in the New Testament, NTS 24, 1978, 199-217; M. Hengel, Psalm 110 und die Erhöhung des Auserwählten zur Rechten Gottes, in: Anfänge der Christologie (hrsg. v. C. Breytenbach/H. Paulsen; Göttingen: V & R, 1991) 43-74 に見られる。
- 16 Schwemer, 77-81, 86-94 を参照。
- 17 L.T. Stuckenbruck, 120-123 を参照。
- 18 4Q401 11.3 には単数形の כֹּהֵן が見られる。
- 19 Loader, 207-208; H.-F. Weiss, Der Brief an die Hebräer (KEK13; 15. Aufl.; Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1991) 149 を参照。
- 20 B.F. Westcott, The Epistle to the Hebrews (2nd ed.; London: Macmillan, 1892) 37-38; G.W. Buchanan, To the Hebrews (AB 36; Garden City: Doubleday, 1972) 24-25; G. Hughes, Hebrews and Hermeneutics (Cambridge: Cambridge University Press, 1979) 8; H. Braun, An die Hebräer (HbNT 14; Tübingen: Mohr, 1984) 48; H.W. Attridge, Hebrews (Hermeneia; Philadelphia: Fortress, 1989) 65 n. 29; L.D. Hurst, The Christology of Hebrews 1 and 2, in: The Glory of Christ in the New Testament (eds. L.D. Hurst/N.T. Wright; Oxford: Oxford University Press, 1987) 156; idem., The Epistle to the Hebrews (Cambridge: Cambridge University Press, 1990) 103; Lane, 37-38; Weiss, 185 Anm. 13 を参照。
- 21 拙稿「ヘブル書における七十人訳の影響史」『ペディアヴィウム』第 42 号, 1995 年, 3 頁を参照。
- 22 Kuss, 30-32; Buchanan, 38-51; Braun, 54; Attridge, 73-74; Weiss, 194; Hurst, Christology, 152-154; idem., Hebrews, 110-111; H. Kosmala, Hebräer-Essener-Christen. Studien zur Vorgeschichte der frühchristlichen Verkündigung (Leiden: Brill, 1957) 4-5, 78; R.N. Brawley, Discursive Structure and the Unseen in Hebrews 2:8 and 11:1: A Neglected Aspect of the Context, CBQ 55 (1993) 84.

- 23 拙稿「ヘブル書における七十人訳の影嚢史」『ペディラヴィウム』第42号、1995年、3頁、O. Kuss, *Der Brief an die Hebräer* (RNT 8; Regensburg: Pustet, 1966) 40; F. Schröger, *Der Verfasser des Hebräerbriefs als Schriftausleger* (Biblische Untersuchungen 4; Regensburg: Pustet, 1968) 82を参照。
- 24 例えば、W.L. Lane, *Hebrews 1-8* (WBC 47A; Waco, TX: Word, 1991) 47; L. Burns, *Hermeneutical Issues and Principles in Hebrews as Exemplified in the Second Chapter*, *JETHS* 39 (1996) 599を見よ。
- 25 H.W. Attridge, *Hebrews* (Hermeneia; Philadelphia: Fortress, 1989) 71 n. 21を参照。
- 26 Lühr, 197-202.
- 27 Lane, 43に賛成。
- 28 詩編8:7a [6a] はキリストの終末的支配の確立を述べる根拠箇所として、他の新約文書においてもしばしば引用されている (I コリ 15:27; エフェ 1:22; I ペト 3:22)。
- 29 Weiss, 196; H. Hegemann, *Christologie im Hebräerbrief*, in: *Anfänge der Christologie* (hrsg. v. C. Breytenbach/H. Paulsen; Göttingen: V & R, 1991) 344-345; H.W. Bateman, *Two First-Century Messianic Uses of the OT: Heb 1: 5-13 and 4QFlor 1.1-19*, *JETHS* 38 (1995) 25.